

# 添付ファイルを人数分印刷・紙でアンケート…

# デジタル化進まぬ学校

教員の長時間労働が問題になっている学校で、業務のデジタル化が十分に進まない実態がある。資料印刷に毎日1時間、一太郎で作った文書をワードに変換…。そんな非効率をなくし、教員が授業に専念するにはどうすればいいか。専門家は現場の工夫と行政の後押しが必要と指摘する。

## いま先生は

「何十年前の働き方なのか」  
東北地方の複数の公立校で支援員をしている40代女性には昨年、勤務校の情報共有の仕方を知り、心の中でそうつぶやいた。

この学校では、教頭が毎朝、教育委員会などからくる大量のメールの添付ファイルをプリントアウトし、先生の人数分コピーして机に置いていた。この作業だけで1時間かかるという。

クラウド上にファイル置いて各教員が見られるようにすれば数分で終わるはず。「民間ではふつうにやっていることなのに」

遅れていると感じたのはそれだけではない。家庭に書いてもらうアンケートを紙で配布・回収し、表計算ソフトに入力するのに3時間かかる▽子どもの学習評価を書き込む「指導要録」を手書きし、1文字でも間違えれば最初から書き直す▽文書ソフトは「一太郎」と決まっており、外部と共有する際は「ワード」に変換して送る…。

が早い」と一蹴された。「先生には教材研究や授業準備に時間を使ってほしいのに」

都内の公立中に勤める非常勤講師の50代女性も、学校のアナログ文化に困惑する。昨年度、コロナの感染防止のため密を避けよう



と、職員会議をオンラインで開くことになった。ところが、教員用の情報端末は全員分はなく、職員室から持ち出せない。結果、参加者のほぼ全員が職員室に集まっていたという。

## AI活用で残業減

デジタルで働き方改革に成功した学校もある。千葉県柏市の市立手賀西小学校（児童数約1200人）は2020年度、卒業アルバムの写真選びにAI（人工知能）システムを導入した。

エグゼック社の卒業アルバム業務効率化システム「アルバムスクラム」の画面。写真に写っている子どもの顔が左側に表示される。

などで電話することは認められていない。保護者の携帯に電話し、折り返し待ちのために遅くまで帰宅できない姿をよくみる。

こうした決まりがあるのはなぜか。同様に保護者と教員のメールを禁じる都内の小学校の校長は「家庭と個人的な関係をつくり、悪用する教員がいるかも。わずかでも可能性があればメールは必要になる」。子どもの安全や個人情報など配慮すべき点が多く、慎重にならざるを得ないという。「学校では、新しいことをやるのは時間がかかる」

エックしていた。計10時間以上の大仕事だったが、導入後は半分ほどに。集まる必要もなくなった。

改革の中心は、主幹教諭の東條正興さん(40)。20年度に教務主任になったのを機に、保護者アンケートにアプリを使ったり、教職員間の連絡をマイクロソフトの「チームズ」で簡略化したりした。6月からは保護者への紙のお便りをなくすため、デジタル配信サービスを使い始めた。

6年担任の月の残業時間は19年4～6月の3カ月で合計300時間を超えていたのに対し、21年の同時期は計約150時間と半分ほどに減らした。

学校業務の情報化を推進する文部科学省の有識者会議委員で、教育研究家の妹尾昌俊さんは「まずはやってみて、起こった問題に対処する」という考え方が現場に必要。自治体は個人情報への扱いなど、デジタル移行の壁になるルールを緩和し、効果や弊害の有無を検証するべきだ」と指摘した。(高浜行人)

教員の働き方について、体験やご意見を東京社会部教育班のメール(educ@asahi.com)にお寄せください。